青森県教育長賞

感謝の「いただきます」

大館中学校（八戸市）　三年　水石　萌菜

「青森の米だば、こっちと違うんだがなぁ。」
電話口で祖母が言いました。その少し不安そうな、力のない言い方が、私は気になりました。

祖母は宮城県で、大震災の前まで米作りをしていました。その頃は祖父も元気だったので、二人でせっせと朝から晩まで働きづくしだったのを覚えています。私たち家族が田植えや稲刈りの時期に手伝いにいくと、とても喜んでくれて、カエルの大合唱の中、日が暮れるまでいっしょに作業しました。作業後の夜ご飯は大盛りです。

「米だば、いっぱいあるっちゃ。たくさん食って早く寝ろ。」
働いたあとのご飯は最高でした。おかずなんていらないくらい、かめばかむほど甘みが出るお米です。父は、塩をおかずにご飯を食べて

「うめぇ、うめぇ。」

と言っていました。

ところが祖父が亡くなり、大震災で田んぼも被災し、祖母は米づくりをやめました。それでも細々と親戚の田んぼを手伝ったりしていましたが、私たちは祖母の作る「ヒトメボレ」を食べられなくなりました。

中学生になって社会科の調べもの学習で「八戸の自然環境と産業」について学びました。青森県人は「やませ」による低温気候に対応する品種改良を重ね、平成九年には「つがるロマン」、平成十七年には「まっしぐら」、そして平成二十七年には「青天の霹靂」を開発してきたということを学びました。米づくりというと祖母や親戚のことしか思い浮かばなかった私は、青森県人の苦労と努力を知って驚きました。たとえ、自然や気候には恵まれなくても、あきらめずに、どうしたらできるだろうと前向きに取り組み続けてきた姿勢を格好いいと思いました。その粘り強さに、青森県人の「らしさ」を感じました。寒さに強く、いもち病に強く、そして味もいい品種開発のために、多くの壁があったことと思います。でも、その壁をのりこえ、あきらめなかった先に「青森県産米」があるのです。この青森県産米は私たち青森県人の誇りだと強く思うのです。

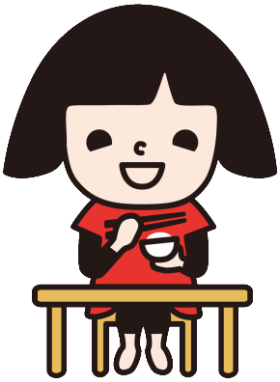
幼い頃から食べていた祖母のヒトメボレには、もちろん祖母の愛や苦労があり、いつも感謝していただいていました。そして青森県産米には、私と同じ青森県人の、想像を絶する努力や苦労や愛があることを知り、感謝の思いがあふれでてきました。と同時に、同じ青森県人としての誇らしい気持ちもわきあがってきました。その時から、スーパーで売っているお米を見る目も変わりました。給食の米飯に対する感謝もいっそう強くなりました。自分は目に見えない多くの存在に支えられていると感じるようになりました。

最近、高齢の祖母を両親が心配して、八戸で一緒に暮らそうか、という方向に話がすすんでいます。私は、ヒトメボレしか食べたことのない祖母に、青森県産米の話をしました。八戸に引っ越してくると、青森県産米を食べることになる

からです。今までヒトメボレ一筋だった祖母がなんと答えるか心配でした。すると

「そこそこの土地をうまく利用して作ったのが一番だっちゃ。昔の人は生きる知恵があった。住んでる人の知恵からうまれた米が一番だっちゃ。とにかく感謝しねばなんね。」

と言って手を合わせました。さすが、私のおばちゃんだ、と本当にうれしくなりました。

私は、県産米を開発し、大事にしている青森県人の一員であることに誇りをもちます。そして、常に感謝の心を忘れないおばあちゃんの孫であることを誇りに思います。今日も手を合わせて感謝します。

「いっせぇのおでっ。いただきます。」